

皮革(1次製品)

《沿革及び特色》

兵庫県における製革業の歴史は極めて古く、弥生時代後期に大陸からの帰化人が鞣製技術を伝え、その基礎を築いたとみられている。その後、江戸時代中期に全国的な商品経済の発達と姫路藩の重商政策のもとに大きく発展した。

当時、既に地域的な分業が行われており、鞣製部門は市川流域をはじめ西の揖保川流域及び東の猪名川流域に沿った地域に発達し、加工部門は姫路城下町の中二階町から東二階町にかけて展開していた。また、原皮は大坂商人を通じて調達され、大地主のもとで村民による賃加工が行われていた。

明治期になって近代的鞣製法が取り入れられ、大正期に軍需専門化が行われ、急速に企業化が進んだ。

戦後は強制的な軍需専門化は分裂し、小規模民需産業として再出発した。業界は、昭和26～38年の間に著しい成長を遂げ、昭和40年代の後半に入り、経営の合理化や設備の近代化を進展させた。

現在、姫路市の高木・御着・網干、たつの市の松原・誉田・沢田及び太子町などが主な産地になっている。企業数、出荷額では全国の2分の1以上を占め、特に成牛革の生産量は約7割のシェアを誇っている。

《団体(問い合わせ先)の状況》

兵庫県皮革産業協同組合連合会 〒670-0964 姫路市豊沢町129番地 あさひビル4階

TEL 079(285)3872 FAX 079(285)3268

ホームページ <http://www.hyohiren.or.jp>

にかわ・ゼラチン

《沿革及び特色》

にかわ製造業は、日本最大の皮革産地である姫路・龍野地域において、原材料の皮革屑や牛骨等の入手が容易であったことから、明治の初めに姫路市周辺に興った。

姫路周辺でも網干地区は20世紀初めに大規模産地として有名になった。さらに産地は、明治40年代から大正期にかけて余部、飾磨、御着などに広がり、昭和に入ると龍野、三坂も加わった。当初は農家の副業的なものであったが、大正になって企業化され、産地としての体制が整った。

その後、昭和32年には企業数が78に増え、全盛期を迎えた。一時、マッチ業界の衰退など需要の後退により業者数が減り集約化されたものの、現在でも全国有数の生産量を有している。

にかわの主な用途は、紙器(紙箱、製本、事務用品)、紙管(紙・布や繊維などの巻き芯や郵送用の円筒等)、サンドペーパー等の研磨紙、マッチなどである。

また、平成23年末に和にかわ(三千本、京上など)の復活により、文化財の修復、日本画、製墨、和紙、湊工芸、紙人形、版画、ガラス工芸等の伝統産業に大きく貢献している。ゼラチンの用途は、食用(デザートや菓子、清酒などアルコール類の清澄剤、ハム等の粘着剤)、医薬用(カプセル、ハップ剤、錠剤等)、写真用(各種フィルム、印画紙、コロタイプ印刷等)、工業用(感圧紙、製本用接着剤等)、化粧

品用(ポリペプチドとしてシャンプー、クリーム、ローション等)など。

最近は特にコラーゲンペプチド(食用や化粧品用等)に、幅広く利用されている。

業界では、従来の網干皮革産業連合組合から協同組合へと組織を一新し、平成7年12月に「西姫路にかわ皮革産業協同組合」として発足した。

《団体(問い合わせ先)の状況》

西姫路にかわ皮革産業協同組合 〒671-1225 姫路市網干区福井45

TEL 079(274)0111 FAX 079(274)1735

《事業活動》

- ・展示会等の販売促進事業
- ・にかわ、ゼラチン、なめし革等に関する研究開発事業
- ・経営及び技術の改善高度化、または、組合事業に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供
- ・福利厚生に関する事業

ゴム製品

《沿革および特色》

「神戸開港30年史」によると、明治18年、神戸に日本護謨製造所が設立され、ゴム球及びゴム枕の製造を行ったことが記されている。これがわが国における最初のゴム工場である。

その後、明治27年にラバー商会在が設立されゴム引の水枕を製造した。さらに明治42年には英国資本によりダンロップ護謨(極東)株式会社が設立され、人力車タイヤや自転車タイヤの製造が始まり、神戸を中心とした大規模なゴム工業勃興の契機となった。

自転車タイヤ製造工場の設立が続いた後、大正2年阪東調帯合資会社によりゴムベルトの生産が始まり、大正7年には朝日堂護謨製造所によりゴム履物が開発される等、神戸のゴム業界は大きく発展した。大正10年末には西神戸一帯に大小100軒余りの工場を数えるに至った。

このように兵庫県は全国一のゴム産地を形成した。しかし、業界は、第二次世界大戦で設備の大半を焼失し、その後も朝鮮戦争による原料ゴム相場の暴落、昭和30年代の生産過剰、昭和46年のドルショック、同48年のオイルショックなど幾多の試練に見舞われたものの、その都度これらの困難を克服してきた。

その後、昭和63年より続いた内需主導型景気もバブル崩壊とともに平成3年下半期より不況に転じ、企業は減収減益に陥った。さらに平成7年阪神・淡路大震災により多くの企業が被災し、大きな損害を被った。

そして長引く不況の中、一時的な回復の兆しが見られたものの、情報技術(IT)関連の不振で世界経済は同時減速の色合いを強め、特に日本経済は内需不振と貿易量の縮小という世界経済の悪循環の最前線に立たされることとなり、ゴム業界においても今なお不振が続いている。

《団体(問い合わせ先)の状況》

兵庫ゴム工業会 〒650-0023 神戸市中央区栄町通4-1-10

TEL 078(382)3520 FAX 078(382)3520

兵庫県ゴム工業協同組合 同上

神戸ゴム工業協同組合 〒653-0032 神戸市長田区苅藻通1-1-24

TEL 078(671)6391 FAX 078(671)6354

ケミカルシューズ

《沿革および特色》

神戸のケミカルシューズ製造業は、昭和25年頃に塩化ビニール等の新しい合成樹脂の開発が盛んになり、ゴム製はき物業界がこれを靴の甲皮材に取り入れたことに始まった。その後、材質の改良や接着剤の開発、加工技術の研究等が蓄積され、昭和30年頃製品としての基礎が確立された。

神戸市の長田区、須磨区にケミカルシューズ製造業者が集中しているのは、①業界の性格が手工業的であること、②流行に左右されやすいため多品種少量生産が主体であること、③大手メーカーの参入が困難で多額の資本を要しないこと、④この地域がゴム製はき物の集積地であり関連業者が多く、下請業者も組織されていること等が主な要因とみられる。

昭和36年頃には、石油化学工業の発達に伴い、ポリエステル系、ポリウレタン系等の樹脂が開発され、底材も天然ゴムに代わって合成ゴムが使用されるようになり、生産も飛躍的に伸長した。昭和40～46年頃は、比較的順調に推移し、輸出比率もピーク時には45%に達したが、昭和47～48年の総需要抑制、金融引締め等の政策と、ドルショック、オイルショック等の経済変動により、輸出が激減した。その後の平成景気により業況は若干好転したものの、バブル崩壊による不況と円高による輸入品の攻勢がケミカルシューズ業界を構造的な低迷に追い込んだ。さらに、平成7年の阪神・淡路大震災は産地に深刻な被害をもたらし、現在、日本ケミカルシューズ工業組合員企業の生産金額は震災前の約7～8割にとどまっている。

業界は、逆境に対処するため、知識集約化を指向した新技術の開発・デザイン開発・規格設定等の事業を実施している。特に震災後は復興のために、「くつのまち・ながた」構想を推進している。対象は区画整理と再開発地域に指定されたJR新長田駅周辺の約90ヘクタールで、ケミカルシューズ業者の「工場アパート」や展示スペースから成る「シューズギャラリー」などにより工場と住宅を集約する。ケミカルシューズ業界は、地元住民や行政と協力し、魅力ある「くつのまち・ながた」の構築を通じて復興を図っている。

平成11年4月には、神戸市が東京・青山にオープンしたアンテナショップ「神戸ブランドプラザ」を開設した。その後、平成14年度からは場所を代官山に移し、情報の受発信をしていたが、初期の目的を達成したとして平成16年3月に閉鎖された。

一方、『くつのまちながた』の中核施設として「シューズプラザ」が平成12年7月にオープンし、情報の受発信基地としての役割を果たしている。将来的には生活と産業が一体となった地域社会の形成こそがケミカルシューズ産業発展の基本的な考えであり、新長田地区を中心として核となるべき施設の誘致やシューズギャラリータウン構想を実現させ全国的にも例を見ない個性溢れる「くつのまち・ながた」を形成し、日本各地あるいは海外からも注目される「人が集まる街」、「夢の持てる街」にすることが産業発展の礎ともなる。

《団体（問い合わせ先）の状況》

日本ケミカルシューズ工業組合 〒653-0037 神戸市長田区大橋町3-1-13

TEL 078(641)2525 FAX 078(641)2529

ホームページアドレス <http://csia.or.jp>

《事業活動》

- ・若手人材の発掘、育成等(ファッションシューズコンテスト・靴プランナー養成)

- ・見本市の充実
- ・流通問題の検討・改善
- ・神戸シューズブランド化事業の推進と研究
- ・貿易自由化・グローバル化に対する海外情報収集等
- ・くつつ子まつりの開催等

マッチ

《沿革および特色》

わが国のマッチの生産は、明治8年東京で始まり、急速に国内市場を満たすと輸出中心の産業になった。そのため、貿易に有利な大阪・神戸近辺に業者が集積した。さらに、労働力や技術的な条件などもあり、兵庫県が全国のほとんどを生産するようになった。

その後、輸出不振、外国企業の進出、過当競争等数々の変化を昭和27年の調整組合の設立によって克服した業界は、設備の近代化を中心に業界の体質改善に成功した。現在も日本の広告マッチは、欧米をはじめ世界各国へ輸出されている。

生産地は神戸から次第に西へ移り、現在は姫路市・太子町・神戸市で生産されている。

使い捨てライター等の普及により、マッチの消費は大幅な減少傾向にある。業界は需要の落ち込みに対応するため、培った経営資源を利用して、土地の有効活用(駐車場・テニスコートなど)、ラベル印刷技術を活かした印刷業界への進出、広告マッチ販路を活かした販促商品の開拓(紙おしぼり・ティシュペーパーなど)、その他の分野へ経営の転換・多角化を促進している。

平成17年には国産マッチ生誕130周年記念式典を神戸で挙行し、新たな歴史を刻んでいる。マッチに関しては業界活性化委員会を組織して、需要開拓の方策を継続して検討する中で、防災用缶詰マッチという新たなジャンルを開拓した。

平成21年にはマッチ専門店を業界で運営するなど、新しい取り組みを始めた。

《団体の組織状況》

一般社団法人日本隣寸工業会 〒650-0012 神戸市中央区北長狭通5-5-12

TEL 078(341)4841 FAX 078(341)4371

協同組合日本マッチラテラル 同上

メールアドレス jmma@match.or.jp

ホームページ <http://www.match.or.jp>

《事業活動》

情報交換・研修会の開催による組合員の経営多角化の支援、マッチの振興・PR、情報収集と伝達、また広く一般にむけて、ウェブサイト「マッチの世界」、マッチ専門店での展示、外部イベントへの協力などを通じて、情報提供・啓発等を実施している。

《その他特記事項》

(1) マッチ業界はマッチの需要減少に対処して、今までの経営資源(製造技術、営業ルート、土地)を利用して経営多角化を進めた。進出事業分野としては、使い捨てライターの名入れや広告用ティッシュの製造・販売、一般印刷、紙器製造、割箸、爪楊枝、プラスチック製品、おしぼり、日用雑貨、食品加工、電機部品製造、駐車場、テニススクール運営など多種多様にわたる。

(2) 現在、業界でマッチ製造の中心となる自動マッチ製造器を設置している企業は、姫路地区を中心に

5社程度に減少し、その製造器自体の耐用年数も過ぎて老朽化しているため、機械維持管理に問題を抱えている。各企業は得意な生産分野に特化し、互いに製造委託等の協力体制を築いている。

(3) 一般社団法人日本燐寸工業会では、マッチに関する各種資料を保管し、一般のマッチに関する研究者の便を図っている。特に明治時代からのマッチ商標の集積は約4万点ある。輸出用マッチの商標が多く、各国の民族性や趣味等が商標を通じて窺い知ることができ、興味深い。

(4) 世界的に安心・安全・地球環境への優しさが求められる中で、雑木・古紙・無害な薬品を使用して作られる「環境に優しいマッチ」はエコ商品として、近年マスコミ等からの注目度も高まって見直されてきており、そのPRに努めている。

平成20年度に、絶滅危惧種生物のイラストをデザインし売上の一部を自然環境保護活動等に寄付する「レッドハウスマッチ」を開発した。平成21年度にはマッチとローソクをセットした「防災用缶詰マッチ」を初めて開発した。平成23年3月の東日本大震災行こう、防災用品として注目されている。

(5) 団体で運営する「マッチ棒」は西日本初のマッチ専門店として神戸の「北野工房のまち」にオープンし、マッチ及び関連商品の展示・販売、マッチの歴史・製造工程等のパネル展示を行い、体験型観光施設として社会に貢献している

線香

〈沿革および特色〉

淡路線香は嘉永年間(1848~1854年)、江井浦の田中辰蔵が泉州堺から熟練工を迎え、原料の杉粉を購入して製造したことに始まった。

当時の江井浦は、百余隻の船が長崎・平戸から阪神間の交易に従事していたことから、原料の調達と製品の輸送に便利な立地条件であった。また農漁業の家庭の女性にとって手ごろな内職になったことも、線香製造の発展の要因となった。

淡路島のお線香は、明治初期には久盛香、藤田香として広く各地に知られるようになった。原料は熊野、河内から仕入れられ、販路も拡大された。

大正に入り、杉粉のほか宮崎県のタブの木の皮を製粉した本粉を使用して香料入りの線香を製造するようになった。その後も業者は増加し、大正12年には淡路線香購買販売組合が組織された。組合は地元の投資を得て、品質の向上、販路の拡大に努めた。

業界は戦後一時的に衰退したものの、最近では年々需要が増加し、大手メーカーの工場進出とも相まって、今日では全国有数の産地(他産地として、堺、京都、大阪、栃木がある)として発展している。

〈団体(問い合わせ先)の状況〉

兵庫県線香協同組合 〒656-1511 淡路市郡家621

TEL 0799(85)1212 FAX 0799(85)0603

ホームページ<http://awaji-kohshi.com/>

〈事業活動〉

- ・「ひょうごふるさと館」、「パルシェ」(淡路市)、全国各地の百貨店などの物産展での線香の販売
- ・線香物故先覚者慰霊祭(例年9月23日)の開催
- ・「お香の日(4月18日)フェア」の開催
- ・海外販路開拓
- ・地域観光事業への取り組み

家具・木工品(神戸家具)

《沿革および特色》

神戸はわが国の洋家具の発祥地である。明治の初め、四国の塩飽諸島から出稼ぎに来た船大工の真木徳助が現在の中央区加納町あたりに製作所を設け、神戸に持ち込まれた外国製家具や船舶装備品などを見よう見まねで製作を始めたのがその最初と伝えられている。

以降、時代を追うに従って専門化が進み、明治末期には5つの洋家具工場と椅子・テーブル類の工場数社を数えるまでになったほか、神戸市西洋家具商組合と神戸家具師組合が結成されるなど組織化も進展した。

大正期には家具全体の3割が洋家具になるまでウェイトは高まったが、大正10年からの不況で企業の離合集散が進んだ。しかし、この時期に外国人を通じて採り入れた新しいデザインや技術がその後の神戸家具の発展の礎となったことは見逃せない。

昭和期に入ると、それまで外国人からの注文が大半だった神戸の洋家具にも徐々に一般家庭からの注文も入りだし、洋家具市場の拡大につながった。

戦中は資材不足から生産中断を余儀なくされる企業もあったが、戦後はいち早く生産を再開し、昭和23~24年頃には製造がほぼ軌道に乗るまで回復した。以降は一般市民向け用途の増加とともに、船舶のインテリアや国鉄・私鉄向けインテリアなども大きな比率を占めるようになったが、船舶関係が大型客船の減少によりレジャー用クルーザーに主体が移り減少するなど、現在では一般市民向け用途が中心となっている。

既に、神戸の洋家具は歴史と伝統に支えられて全国に浸透し、高級和洋家具分野で独自のデザインを案出するなどにより高い評価を受けている。

平成7年の阪神・淡路大震災では、神戸の中心地に居を構える販売店の開店が平成9年にずれ込むなど復興が遅れた企業もあったが、生産工場は被災の程度が軽かったこともあり震災後比較的早期に立ち上がった。

《団体（問い合わせ先）の状況》

兵庫県家具組合連合会 〒651-0095 神戸市中央区旭通3-2-10 (株)三上工作所

TEL 078(242)4808 FAX 078(251)1927

団地協同組合神戸木工センター 〒655-0003 神戸市垂水区小束山本町1-4-11

TEL 078(784)5005 FAX 078(784)5007

生田家具組合 〒650-0004 神戸市中央区中山手通1丁目22-23 (株)クリアシオンフジイ

TEL 078(241)3011 FAX 078(241)7299

神戸葺合家具組合 〒651-0095 神戸市中央区旭通3-2-10 (株)三上工作所

TEL 078(242)4808 FAX 078(251)1927

ホームページ <http://kobe-youkagu.com/>

《事業活動》

兵庫県家具組合連合会

- ・生産販売の調査・研究
- ・技能検定並びに技術向上
- ・従業員の福利厚生

- ・各種団体の連絡連携
- ・不況対策

神戸木工センター

- ・団地運営
- ・共同事業
- ・福利厚生
- ・教育・情報提供
- ・労働保険事務組合
- ・兵庫県下・近畿ブロック全国工場団地等諸団体との連絡・連携

生田・神戸葺合家具組合

- ・親睦を中心とした事業活動

そろばん

《沿革および特色》

そろばんは、室町時代末期に中国から長崎へ伝来したといわれ、中棧の上二つ玉、下五つ玉の中国そろばんが改良され、現在の形となった。

わが国で日常生活に使われはじめたのは、文禄年間（1592～95）とみられている。当時の数学者毛利勘兵衛重能が、京都二条京極で「天下一割算指南」という道場を開き、多くの人々に珠算を教授したのが全国に普及するきっかけとなった。

播州地方でのそろばん製造は、天正年間（1573～91）に豊臣秀吉が三木城を攻略した際、大津方面にのがれた住民が、大津そろばんの製造技術を習得し、帰郷して三木・小野周辺で製造を始めたのが播州そろばんの起源といわれている。

そろばん製造は小野市を中心として発展し、全国生産量の多くを占めるに至った。昭和35年頃がそろばん製造の全盛期であったが、①電卓の普及、②学校におけるそろばんの授業時間の減少、③官公庁や一般企業のコンピューター導入、などにより需要は減少している。

しかし、そろばんは古来から持つ機能や、教育的効果が認められ小学校の算数の教科に取り入れられており、最近では脳を活性化させ、集中力や創造力を養い、老化防止にも役立つ用具として見直されてきている。

「播州そろばん」は、昭和51年6月に通産大臣から伝統的工芸品の指定を受けた。

小野市の地場産業として、小野市・小野商工会議所・小野市珠算振興会が中心となり、振興事業を展開している。

《団体（問い合わせ先）の状況》

播州算盤工芸品協同組合 〒675-1372 小野市本町600

TEL 0794(62)2108 FAX 0794(62)2109

兵庫県木珠事業協同組合 〒675-1362 小野市久保木町563

TEL 0794(62)4849

播州算盤製造業組合＊ 〒675-1377 小野市葉多町795

TEL 0794(62)3839 ＊印は任意団体

《事業活動》

播州算盤工芸品協同組合

- ・原材料、副資材の共同購入
- ・見学会、研修会、講演会の開催
- ・教育、情報サービス

播州算盤製造業組合、兵庫県木珠事業協同組合

- ・副教材の共同購入
- ・技術指導
- ・見学会、交流会の開催

木工芸品

《沿革および特色》

「木珠のれん」は、算盤の産地である小野市で、旧兵庫県小野工芸指導所が研究開発し、昭和30年頃からそろばん玉を応用して製品化したのが始まりである。

昭和35年頃から需要が急速に増大し、当初夏物商品として扱われたものが、生活様式の変化に伴い四季商品化した。

その後、昭和45年頃から木珠のれんより小家具木工(工芸品)の分野に進出し、小野のインテリア商品として人気を集めている。

《団体（問い合わせ先）の状況》

播州算盤工芸品協同組合 〒675-1372 小野市本町600

TEL 0794(62)2108 FAX 0794(62)2109

兵庫県木珠事業協同組合 〒675-1362 小野市久保木町563

TEL 0794(62)3839

《事業活動》

- ・デザイン開発と新製品の試作
- ・若手後継者の育成
- ・展示会などへの出展と視察
- ・研修会・講習会の開催

杞柳製品

《沿革および特色》

杞柳製品の製造は、豊岡市のほぼ中央を流れる円山川のほとりに自生していたコリヤナギを利用して奈良時代に始められた。柳行季は天皇の御物として伝えられており、現在も当時の柳行季が奈良県の正倉院に保存されている。豊臣時代城下町の形成と共に産業としての歩みが始まり、江戸時代初期に豊岡藩主となった京極家が熱心に藩の専売品として保護育成に努め、全国に豊岡の柳行李として知られるようになった。

明治14年、バンドと取手を取り付けた手に持てる「こうりかばん」が作られ、手に提げる物の製造が始まり、明治42年創案したバスケットは大正バスケットの全盛時代を築き、果物籠、洗濯籠、魚籠等数々の日用品が製造され、海外に輸出し大きく発展した。物を運ぶのに適した柳行李は戦争の度に軍

用行李として大量生産され、戦後は買い物籠、盛り籠、花籠、等様々な製品が生産された。

昭和48年、中国との国交回復以後、国際化の進展に伴い、次第に海外からの安価な製品の流入が増加し、豊岡杞柳製品の生産は減少の一途を辿った。

平成4年、国の伝統的工芸品の指定を受け、後継者の育成に努めた結果、現在では、若い伝統工芸士がつくるおしゃれな手提げ籠が注目を集めるようになり、平成15年度のグッドデザインひょうご大賞を受賞するなど、取り組みの成果が実を結びつつある。

なお、杞柳の語源は、「孟子」の「人性ヲ以テ仁義ヲ為スハ、猶ホ杞柳ヲ以テ、杯倦ヲ為ルガゴトシ」(本来、自然なままの人性に、仁義の気質を持たせるのは、ちょうど杞柳＝コリヤナギで曲げ細工をつくるようなものである)により、コリヤナギの学名を持つ柳の漢字名である。

《団体（問い合わせ先）の状況》

兵庫県杞柳製品協同組合 〒668-0801 豊岡市赤石1362

TEL 0796(23)3821 FAX 0796(24)0913

《事業活動》

- ・編組製品のPR及び新製品開発事業
- ・後継者育成事業
- ・原料柳の共同栽培
- ・作品展の開催及び展示会等への出展

かばん

《沿革および特色》

豊岡地方では、江戸時代より発展していた杞柳産業を基盤に、大正末期から昭和にかけてファイバーかばんが製造され始めた。柳行李の販売網に乗って、急速に伸び、昭和10年頃には当地の主産業になった。

原材料不足で大戦中は停滞したものの、戦後の復興は早く、ミシン縫製の導入、オープンケースの考案、新素材としての合成皮革・ナイロン等の活用など、様々な改革を行った。また、産地は「メーカー」、「産地問屋」、「かばん材料商」、「下請」による構造となっている。

昭和52年に始まった円高によって昭和53年度の生産高は最低を記録した。

平成6年には「豊岡・世界のかばん博」開催を契機に、国際かばん都市の創造を目指して、豊岡産地の情報発信に努めたが、平成7～8年頃からの円高の影響により、輸入品との競争が激化し、国内向け出荷数量が減少した。それに対応するため、産地では、集積活性化法に基づき、平成7年度（～11年度）から生産工程の合理化、IT化、新製品の開発などを推進した。

近年は、単にかばんの生産のみならず各種の容器など、あらゆる分野への取り組みや、天然皮革素材の活用が進められ、平成15年には、「豊岡グラフィティ」「豊岡トラディショナル」を発表し、豊岡が築き上げてきた資産を活用し、豊岡が様々な技術とスタイルの蓄積された「厚みのある産地」であることをPRしている。最近では異業種との交流が積極化し、販路開拓、新製品開発などで成果をあげてきた。

平成16年には、台風第23号により産地内の多くの企業が被害を受けたが、同年より取り組んでいたJAPANブランド育成支援事業で、平成17年7月にIFFに出展し、高い評価を得た。

商標法改正により平成18年4月1日より導入された地域団体商標制度に「豊岡鞆」も地域ブランド

として申請し、平成18年11月10日付で兵庫県の中では第1号の登録となった。その後、東京での展示会開催、雑誌広告などPR活動を行っている。その結果、アパレル業界、雑貨業界など、他業界から注目を集めている。

《団体（問い合わせ先）の状況》

豊岡鞆協会 〒668-0041 豊岡市大磯町1-79

TEL 0796(23)7833 FAX 0796(24)2697

兵庫県鞆工業組合 同上

兵庫県鞆卸商業組合 同上

兵庫県鞆材料商協同組合 同上

協同組合豊岡鞆工業センター 〒668-0051 豊岡市九日市上町817-12

TEL 0796(22)7652 FAX 0796(22)7653

《事業活動》

○ 豊岡鞆協会

上部団体との連繋を密にし、業界の発展・向上のために、陳情、具申、情報交換をはじめとする業界の総合的組織体としての活動を行う。

（豊岡鞆協会ホームページ <http://www.bag.or.jp>）

○ 兵庫県鞆工業組合

組合員の指導・教育事業、情報資料の収集・提供、経営の安定化の研究を行う。地域ブランド「豊岡鞆」のPR、販路拡大事業を行う。

（豊岡鞆オフィシャルサイト <http://www.toyooka-kaban.jp>）

○ 兵庫県鞆卸商業組合

指導・教育、資料の収集・提供、安定事業、合理化の研究、共同販売に関する事業、運送に関する事業等を行う。

○ 兵庫県鞆材料商協同組合

情報の収集・提供、共同倉庫設立調査研究等の事業を行う。

○ 協同組合豊岡鞆工業センター

「豊岡鞆団地」の宣伝・啓蒙活動、組合員・従業員への研修・講演会・情報交換・懇親等を行う。

（豊岡鞆団地ホームページ <http://www2.nkansai.ne.jp/org/kaban/>）

故繊維加工

《沿革および特色》

高砂周辺に集積する故繊維加工業界は、明治34年4月の三菱製紙(株)高砂工場の操業に伴い、廃棄されるボロを利用することから始まった。

明治・大正時代、ボロは、主に製紙、火薬、毛織原料として使用されていた。昭和時代になって、経済の工業化の進展に伴い、機械拭布用(ウェス)としての用途が開拓された。

その後、製紙の原料がパルプに移行するにともない、故繊維の販売先の中心は海外に向けられた。業界は輸出向加工分野で隆盛をみたが、戦争により、貿易の中断を余儀なくされた。

戦後、業界は、貿易の復活とともに再び活況を取り戻し、外貨の不足していたわが国の外貨獲得産業として活躍した。同じ頃に設立された任意組合は、昭和33年に現在の組織に改組され、業界の柱とし

て大きく貢献している。

現在も故繊維加工業は、家庭で廃棄されるボロを原料にして加工生産することにより、製造業界に資材を供給しており、リサイクル産業として社会に貢献している。

《団体（問い合わせ先）の状況》

兵庫県故繊維加工協同組合 〒676-0033 高砂市高砂町材木町1216
TEL 079(442)1585 FAX 079(442)1588

《事業活動》

- ・販路開拓
- ・共同販売
- ・原材料及び資材の共同仕入
- ・廃棄古布の処理問題

ポリプロピレン樹脂紐

《沿革および特色》

昭和40年代に入り、青垣町の人口は、過疎化の進行によって大正以来最低となった。町議会において過疎問題がとり上げられ、産業建設常任委員会が中心となって、地場産業の見直しのための産業視察が進められた。

昭和37年頃、日本でもポリプロピレン樹脂の生産が企業化され、青垣町でセロハンテープを生産していた業者が大阪での見本市を見学したのが、ポリプロピレン樹脂に着目したきっかけになった。町議会でもポリプロ延伸テープの特性に注目し、すでに家内工業的に生産に取り組んでいた滋賀県水口町や、PP延伸テープの生産を行っていた四日市町を視察するなどの調査を進めた。そして昭和43年12月、24名の参加が決まり、製縄機50台を導入し、「青垣PPロープ生産組合」を結成し生産を開始した。

昭和44年5月、中小企業協同組合法に基づく「青垣ポリプロピレン樹脂工業協同組合」に改組し、同年12月、組合の直営工場を建設した。当初はブラシ用繊維等の生産を行っていたが、組合員の材料不足を解消するため、チッソ化学加工研究所の技術指導を受け、加工用原料であるPP延伸テープの生産体制の確立を目指して、第一次から第三次にわたる増産計画を実施した。47年には月産130トンの生産体制が整い、組合員も53名に増加した。町民からも「PP組合」と愛称で呼ばれるなど地元浸透した。

昭和46年には、組合の全額出資による「青垣物産株式会社」を設立して専門の販売会社とし、生産と販売の両部門を分業化し、組合の強化を図った。この生産と販売の分業化体制の強化が、その後に訪れたオイルショックによる不況を乗り越える力となった。そして、創設以来続けていた商社を親とする下請的取引に終止符をうち、「青垣ポリプロピレン樹脂工業協同組合」による生産、「青垣物産株式会社」による全生産量販売へと移行し、現在に至っている。

「PP組合」から「APIC(アピック)」への略称の変更などを行い、新しい地場産業として地域と組合の発展に努めている。

《団体（問い合わせ先）の状況》

青垣ポリプロピレン樹脂工業協同組合 〒669-3842 丹波市青垣町沢野625-5
TEL 0795(87)1737 FAX 0795(87)1017

ホームページ <http://www.apictanba.com/>

《事業活動》

- (1) PP延伸テープ製造、製品加工、工場の運営
- (2) 品質管理、技術指導、機械修理サービス
- (3) 新製品、新機種の共同開発研究、組合員の機械導入及び機種の設定
- (4) 組合員の教育福利厚生事業
- (5) 販売組織である「青垣物産(株)」による共同受注、共同販売

真珠核

《沿革および特色》

真珠核は、養殖真珠の芯となるもので、養殖真珠の「原料」である。この核をアコヤ貝に植え付けて、海中に沈めておくと真珠層が巻きついて、真珠が誕生する。

真珠核の原材料は、米国・ミシシッピー川のオーヒラ貝やミツヤマ貝である。これを神戸の商社が輸入するため、真珠核製造業者は、陸上・海上輸送とも淡路島島内では最も利便の良い洲本市に集中している。

真珠核製造業者は、貝ボタン製造業者からの転業者が多い。明治40年、ドイツ人が貝ボタンの製造法をわが国に伝え、明治42～43年頃に洲本市内で製造が始まった。原料、製品の輸入基地神戸港に近接しているため、家内労働力を活用した産業として栄え、軍服用ボタンとして需要が伸びた。第二次大戦中は産地全体で淡路製鈕を設立し、業界を一本化した。戦後、統制解除となったが、主原料のドブ貝の輸入が中止になったため、南方産の海水貝に原料転換した。

昭和25年、真珠核もボタンと同様に貝を加工する製品であることから、洲本市の1業者が淡水貝を使い真珠核製造を手掛けた。昭和30年代は合成樹脂系の化学ボタンが登場したことに伴い、化学ボタンへの転業が相次いだ。これとほぼ同時に大阪府下の技能者を迎えて本格的な真珠核の製造が始まった。昭和35年から40年頃にかけて世界的な真珠ブームがおこり、化学ボタンに押された貝ボタン業者が一斉に真珠核製造に転業した。最盛期の昭和40年代前半には、業者数は130に達した。

好況は長くは続かず、昭和40年代後半には、(1)生産過剰、(2)海洋汚染、(3)真珠ブームの沈静化、等のマイナス要因が重なり、業況は悪化した。その後、昭和50年頃には再び活気を取り戻し、需要と供給のバランスが回復した。

昭和55年に11業者によって、淡路真珠製核協同組合が設立された。この組織化により、相互扶助の気風が生まれ、目まぐるしく変化する社会に組織力で対応できる基盤が確立された。

しかしながら、平成13年9月の米国同時多発テロ以降、世界的に宝飾品需要は冷え込んだ状態が続いており、真珠核生産高も減少傾向となっている。

《団体（問い合わせ先）の状況》

淡路真珠製核協同組合 〒656-0025 洲本市本町3-3-25洲本商工会議所内

TEL 0799(22)2571 FAX 0799(24)1550

淡路真珠核生産組合 〒656-0051 洲本市物部3-2-79

TEL 0799(22)0443 FAX 0799(22)3666

《事業活動》

- ・真珠核販売面についての協議
- ・原材料輸入についての協議

真珠加工

《沿革および特色》

天然真珠は昔からペルシャ湾、インド、オーストラリア沿岸、セイロンなどで真珠貝から産出され、その希少価値と高貴な光沢によって、世界中の人々に珍重され愛されてきた。日本においても、日本書紀、古事記、万葉集にすでに記述が見られ、また東大寺三月堂の観音像や正倉院の御物に真珠を使用したものがある。

真珠養殖も古くから試みられてきたが、量産は難しかった。その産業化の始まりは、明治26年に御木本幸吉が作った半円真珠である。その後、多くの人々により研究が続けられ、御木本幸吉、西川藤吉、見瀬辰兵その他の協力者の努力により明治40年に「真円真珠施術技術」が発明され、一連の特許が出願された。大正13年にはパリ真珠裁判でアコヤ養殖真珠は本物の真珠であることが認められ、昭和3年には特許の公開を契機に全国各地に真珠養殖事業が広まった。施術作業がきわめて微妙なものであるため、アコヤ真珠養殖は日本独特の産業として発展した。

神戸と真珠の関わりは、神戸港開港後の明治中期頃からと言われており、昭和3年の真円真珠特許公開後には真珠の集散地として活況を呈するようになった。

神戸において真珠加工業が発展したのは、

- (1) 三重、愛媛、長崎、熊本などのアコヤ真珠生産地に近く、立地条件に恵まれていたこと。
- (2) 貿易都市として天然真珠の時代から長く輸出貿易を促進していたこと。
- (3) 大正時代に神戸の北野町周辺に加工技術を開発した真珠業者が集まり、研磨や穴あけの加工技術が次々に開発されたこと。
- (4) 海と山に囲まれた神戸の自然環境による、安定した採光条件が穴あけや連組み等の真珠加工工程に適していたこと。

等の要因によるとみられる。

戦中、戦後の混乱期を経て、戦後間もなく海外への輸出が再開された真珠は、政府間貿易という管理貿易体制のもとで、外貨獲得に重要な役割を果たした。また、進駐軍やその家族が持ち帰る土産物として人気を集め、さらに民間貿易が再開された昭和24年以降には、輸出はアメリカを中心に著しく伸長した。

この状況は、作れば売れることによる生産増大、品質低下をもたらし、昭和40年代には輸出不振による不況期に入った。これを克服して昭和50年代からは安定成長を続けてきた真珠業界であるが、バブル崩壊後は、アコヤ貝の異常斃死による浜揚げの激減、中国産の淡水真珠をはじめとする海外産真珠の生産量の増大、加工技術の一部流出と低コストを背景とする海外での加工品の大量生産などによる市場の混乱から、多くの問題に悩まされている。

しかし、依然として日本の加工技術の水準は非常に高く「日本品質」として海外市場に於いては別格の認識となっている。

平成15年度より、従来は香港で開催されていた海外産真珠の入札会を神戸で原則として年2回程度「国際保税展示入札会」の形態で行うことにより、海外顧客の神戸来訪を促し国際的な取引の増進を図ることや、香港に於いて開催されている大型の国際宝飾展への団体参加により輸出の促進を行ない、神戸は真珠の加工、取引の場として、また海水産真珠の集散地としての世界的地位を堅持している。財務

省全国通関統計をみれば、昭和50年代以降、日本からの真珠輸出の約8割が神戸から行なわれていることが確認できる。

《団体（問い合わせ先）の状況》

日本真珠輸出組合 〒650-0031 神戸市中央区東町122

TEL 078(331)4031 FAX 078(331)4345

PCK協議会・神戸真珠親睦会 〒650-0031 神戸市中央区東町122 日本真珠会館2F

TEL 078(332)8050 FAX 078(332)8055

神戸真珠クラブ協同組合 〒650-0004 神戸市中央区中山手通1-21-13 パール・コーポラス2F

TEL 078(232)2221 FAX 078(232)2233

NEO PEARL KOBE 〒650-0031 神戸市中央区東町122 日本真珠会館内

TEL 078(335)1755 FAX 078(335)1775

《事業活動》

- ・真珠の品質検定事業および指導
- ・海外市場における広報およびブランディング
- ・真珠の輸出入統計他の資料作成と分析及び配布
- ・ホームページの運営
- ・輸出不適格真珠の集荷処分事業
- ・国際保税展示入札会の開催
- ・海外ジュエリーショーへの出展およびジャパンパールパビリオン運営
- ・DVD、ブルーレイディスク等真珠紹介動画媒体の販売、配布による広報活動
- ・KOBE PEARL SOUQ 及びパールミュージアムの運営による真珠関連製品などの展示及び紹介

参考URL

兵庫の地場産業（概説）	http://kdskenkyu.saloon.jp/jibasan.htm
同上（食料品）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs01foo.pdf
同上（繊維）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs02tex.pdf
同上（化学・雑貨）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs03che.pdf
同上（窯業・土石）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs04pot.pdf
同上（機械・金属）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs05mac.pdf
兵庫の伝統的工芸品（概説）	http://kdskenkyu.saloon.jp/tracrafts.htm
